

## 研究ノート

### 一八七九年のW・アンダーソン「日本美術の歴史」

鈴木 廣 之

ウィリアム・アンダーソンの名は『日本の絵画芸術』の著者として記憶されることが多いのではない。本書 *The Pictorial Arts of Japan: With a Brief Historical Sketch of the Associated Arts, and Some Remarks upon to the Pictorial Art of the Chinese and Koreans* は立派な革表紙と三百頁の本文に図版八〇葉のつく堂々たる大著で、一八八六年にロンドンで刊行された。おそらくジャポニスム研究の進展の恩恵だと思いが、このような認識は比較的最近のものだろう。

アンダーソン William Anderson (一八四二—一九〇〇) の本業は医学だった。一八七三年(明治六)に來日して海軍省に勤務し、品川西台町の海軍病院で後進の指導にあたるとともに、自らも脚氣の研究を進めて『安氏脚氣病説』を一八七九年に刊行した。その活動と業績は、お雇い外国人のなかでも医学と海軍の分野を扱った文献にしばしば取り上げられるものの、本業をはなれた美術方面の活動については簡単な言及しかない。美術史でも状況は大差なく、たとえば一九七六年の隈元謙次郎『お雇い外国人16美術』ではその事跡がひととおり紹介されたにすぎない。<sup>(1)</sup>

一八八〇年(明治一三)、海軍省との契約を解いたアンダーソンは帰国の途につく。その後、『日本の絵画芸術』と同じ一八八六年に『大英博物館日中絵画目録』 *Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum* が、九五年に『日本の木版画』 *Japanese Wood Engravings: Their History, Technique and Characteristics* が刊行された。美術方面での知名度がアーネスト・フェノロサなどに遠く及ばないのは、アンダーソンの主要な業績が帰国後に集中したためだろう。

一方、末松謙澄が『日本の絵画芸術』を翻訳し、二分冊にして一八九六年(明

治二九)と九七年に刊行された『日本美術全書沿革門』と『日本美術全書応用門』がある。訳者の末松は伊藤博文の女婿で、新聞記者から政治家へ華麗な転身を遂げ、抄訳ながら『源氏物語』の英訳をはじめて試みたことでも知られている。『日本美術全書沿革門』の緒言のなかで本書を翻訳する意義にふれた末松は、「本邦人ノ著述ト雖モ美術ニ関スルモノニシテ予未ダ此書ニ及ブモノヲ見ズ」と述べていた。だが、三年後の一九〇〇年に本格的な内容と立派な図版を備えた『稿本日本帝国美術略史』の仏語版 *Histoire de l'art du Japon* が刊行されたためだろう、後世の専門家がこの訳書に注目することはなかった。

ここからは私事にわたるが、幕末明治のイギリス外交官アーネスト・サトウ Ernest Satow のある論文を求めて『日本アジア協会紀要』 *Transactions of Asiatic Society of Japan* の記事を検索したとき、第七巻に掲載されたアンダーソンの「日本美術の歴史」“A History of Japanese Art”を寓目した。標題につづいて“Read 24th June, 1879”とあるので、この日の日本アジア協会の会合で口頭発表されたことがわかる。

注目されるのは、いうまでもなく一八七九年(明治一二)六月二十四日という時期だ。この論文はアンダーソンの滞日中の業績であるだけでなく、日本美術の通史の初期の試みになる。その後、菊池重郎「アンデルソン小考」が工学寮のお雇いだった建築家のもう一人のアンダーソンの履歴を追ってこの論文に言及していることを知った。<sup>(2)</sup>だが、この論文は主著『日本の絵画芸術』以上の、さしたる注目を受けることがなかったようだ。

しかし後世の関心の薄さと対照的に、当時の美術方面におけるアンダーソン評価には目をみはるものがあつた。手掛りは、サトウとホーズ Albert George Sidney Hawes の共編になる『中央部及び北部日本旅行案内』 *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* にアンダーソンの「絵画芸術」“Pictorial art”と「彫刻芸術」“Glyptic art”が収録されたことだ。この『旅行案内』(初版は一八八四年(明治一七)の改訂第二版は実用的な知識をもつと読者に提供するよう序章が大幅に増補され、「日本語」をはじめ「旅券」「通貨」「地図と参考書目」「気候と天気」など二四の新稿が収録された。「絵画芸術」と「彫刻芸術」はその第二三節と二四節にあたる。サトウは第二版の前書きのなかで、「日本の美術の記述の中で漆器と

陶磁器に関する事柄は紹介するまでもないと判断した」とし、漆器と陶磁器を扱った二、三の先例をあげている。<sup>(3)</sup>これらにくらべ絵画と彫刻の歴史が当時の読者にまだ知られておらず、アンダーソンがそれらを概観する記事を書く適任者と見られていたことがわかる。

もう一つの例に、一八九〇年(明治二三)に初版の出たチェンバレン Basil Hall Chamberlain の『日本事物誌』 *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan* がある。その「アート」の項目の「参考書」"Books recommended"欄にアンダーソンの著作があげられている。その冒頭には一八八四年の『中央部及び北部日本旅行案内』第二版の「絵画芸術」論があげられ、次いで、八六年の『日本の絵画芸術』と『大英博物館日中絵画目録』、七九年の『日本アジア協会紀要』の論文「日本美術の歴史」の順でアンダーソンの著述四点が並ぶ。五位以下は一八八三年のギンズ Louis Gonse 『日本の美術』 *L'art Japonais* と、当時新刊の八九年のヒュイシ ャ Marcus B. Huish 『日本とその芸術』 *Japan and Its Art* の二点だけから、これらアンダーソンの著作に対する当時の一般の評価が想像できる。なかでも一八八一年に初版の出た『中央部及び北部日本旅行案内』は、それ以前に「外国人が利用できる総合的・広域的な案内書はほとんどなかった」<sup>(4)</sup>待望の書物だったから、多くの読者を獲得したはずだ。アンダーソンの日本美術論も広く受け入れられたことだろう。

\*

一八七九年の「日本美術の歴史」については、著者自身が『大英博物館日中絵画目録』の序文でこれにふれ、「日本の絵画芸術の歴史における主要な事実を収集記録した最も早い試みであつたと信ず」と胸を張った。その内容を確かめてみることにしたい。

論文は、序論二頁、本論二二頁、総論八頁、特質論三頁で構成される。合計三五頁のかんりの分量がある。まず序論では、日本美術を概観して全体を六つの分野に分けている。(一) 絵画芸術、(二) 可塑芸術—土製形象、陶器、磁器、(三) 木、石、金属、象牙などの素材の彫刻、(四) 木版と銅版の版画、(五) 漆、(六) その他、がそれだが、この分類はアンダーソンの構想する日本美術史の各章に対応しているよう<sup>(5)</sup>だ。実際「日本美術の歴史」を標題に掲げたこの論文の本論には「絵画芸

術」"PICTORIAL ART"の副題が付けられているだけでなく、全頁をとおして「アンダーソン・日本絵画芸術の歴史」"ANDERSON: HISTORY OF JAPANESE PICTORIAL ART"の柱記がある。実質上、この論文はアンダーソンの構想の第一章にあたるものと見るべきだ。同様に、一八八四年の『中央部及び北部日本旅行案内』第二版の「彫刻芸術」は第三章に相当するものだろう。

全体の六割以上を占める本論は、画家を中心にして絵画の歴史を五世紀から概観している。内容を詳しく吟味する余裕はここにはないが、たとえば明兆をフラ・アンジェリコに喩えて一五世紀の芸術ルネサンスの到来を告げる者としている点や、「足利政権」"Ashikaga dynasty"の時代を、チマブエやジオットらによるイタリア芸術の復興から一世紀ほど後の絵画のリバイバル期と見ている点などが興味ぶかい。明瞭な時代区分の意識は窺えないが、この論文を簡潔にまとめた一八八四年の『中央部及び北部日本旅行案内』の「絵画芸術」では四つの画期が提唱されていて注目される。すなわち、九世紀半ばの巨勢金岡の登場以前を第一期とし、金岡以降を第二期、そして足利政権下、中国の影響によるルネサンスが第三期の到来を告げる。第三期は一八世紀の終盤にさしかかる一七七〇年頃に終り、第四期が一七八〇年頃に円山応挙に率いられた「自然主義の画派」"naturalistic school"、四条派の登場によって始まる、と見る。第四期の特色には新たな浮世絵派の台頭も指摘されている。

次の総論では、中国と朝鮮の絵画芸術をその母胎と見て、日本の絵画芸術理解のためにこれらとの比較が必要であることを説き、そこに共通する表現上の特質を、構図、素描、筆法、遠近法、彩色、陰影法の六つの観点から述べている。後段では「中国美術の一支脈である以上の高い位置を日本美術が求めることはできない」という結論を示し、「この国で最も崇敬された画家とは、外国から与えられた手本を最も上手く模倣することに成功した者であった」と指摘する。その後「円山応挙の登場によって、ようやく自国の美術を完全に再建する道が示された」ものの、狩野土佐の旧派の隠然たる力と、沈南蘋らの新たな中国派の台頭によって十分な展開を望めなかったが、「一九世紀が始まると、葛飾北斎の新しい浮世絵のなかに真の国民美術を誇る権利が日本に与えられた」と総括している。国民美術 "national art" の成立に美術の進歩を求める歴史観が注目される。また、応挙らの評価に、一八八四

年の「絵画芸術」のなかで示された四つの画期の萌芽を見ることは可能だろう。

最後の特質論では、「日本ではヨーロッパと同様に絵画芸術に高い評価が与えられ、絵画批評の分野も広く行き渡っているが、評価の規範が西洋と極東ではまったく異なる」と指摘する。日本では運筆が絵画の品質判断の中心に置かれ、忠実な自然の描写は副次的なものとなされる。したがって簡潔な線描が評価され、対象の忠実な描写は粗野や無趣味として嫌われる。われわれは、日本では書が絵画と同等の地位を占めていることを悟る。注目すべきは日本語の「かく」が「書く」と「描く」の二重の意味をもつことである、と述べている。

ここで確認しておきたいのは、ヨーロッパの基準に照らして日本の絵画が美術として評価できること、そして日本の絵画の歴史がヨーロッパの知的対象となりうることをアンダーソンが欧米の読者に証明してみせた点だ。彼我の美術の価値観の相違が強調されているようにも思われるが、その前提にあるのはあくまで「美術」概念の普遍性であることを見逃してはならない。一八九〇年の『日本事物誌』初版の「アート」の項目にチェンバレンが興味ぶかい注を付けている。「誰も注意しない奇妙な事実は、日本語にはアートに対する真の固有の語がないことである。ヨーロッパのファイン・アートを訳すために、漢字の「美」と「術」を合わせて美術という合成語を最近発明した。この合成語は教育のある日本人にしか理解されない」と、ある<sup>(6)</sup>。ヨーロッパの美術概念を参照して日本の「美術」が構想されているのは明白だ。アンダーソン自身、この論文の特質論のなかで「〔日本で〕一般に人気のある画派や個人画家を評価しすぎてはいけない。このことは確かに、賞賛されるその作品にある際立った品質が備わっていることを示しているが、必ずしもそれは高度の芸術的秩序がもつ品質ではないからである」と、読者の注意を促している。

アンダーソンが論文を発表した一八七〇年代は、日本美術を論じた書物が欧米で出始める時期に当たる。その背景に、一八六二年のロンドン万博、六七年のパリ万博、七三年のウィーン万博に促されたコレクターの登場が指摘されている<sup>(7)</sup>。一八七〇年代の例に、七四年のオーズリー George Ashdown Audsley『日本美術覚書』Notes on Japanese Art に始まり、七五年のオーズリーとボウズ James Lord Bowes の『日本の陶器』Ceramic Art of Japan など、七六年のジャークヴィス James Jackson Jarves の『日本美術

瞥見』A Glimpse at the Art of Japan など、七八年のオールコック Rutherford Alcock の『日本の美術と工業』Art and Art Industries in Japan の四つの著作がある。

この数が多いか少ないかは別として、イギリスの初代駐日公使オールコックを例外として、いずれの著者も来日経験がなかった点にこの時期の特色がある。この点、アンダーソンは圧倒的に有利な立場にあった。『日本美術全書沿革門』の緒言のなかで末松兼澄が、「アンデルソン氏本邦在留中蒐集スル所ノ画幅類三千餘点ニ及ブ、今英国博物館備品トナレリ」と述べており、アンダーソンが膨大な収集をしたことがわかる<sup>(8)</sup>。議論の背景に実際の収集活動があったことが見逃せない。また、サトウの日記によると、一八七九年一二月、サトウはアンダーソンと大阪の造幣局で落ち合い、翌一二月一日に汽車で京都に出て、いくつかの窯元を訪ねた。六日には京都を出発し、宇治の平等院から奈良へ出て、西大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺を見学している。その後、大阪の四天王寺を訪れている<sup>(9)</sup>。これは外国人によるかなり早い時期の古寺巡礼として注目される。

今後、アンダーソンの滞日中の行動を追跡する必要があるだろう。それだけでなく、日本美術の歴史がどのようにして知識として蓄積され形成されていったのか、丹念に追いかける必要があるだろう。はたして彼らはどのようにして知識を得たのか。一八七九年の『日本美術の歴史』には『本朝画史』をはじめ、複数の歴史資料が明らかに参照され、実際に言及、引用されている。サトウやチェンバレンのように日本語の読み書きの優れた能力があれば別だが、おそらくそうでないアンダーソンはどのような手段を講じたのか。鳥羽絵の議論のなかで「鳥獣戯画」の断簡を所収する「東京のニナガワ氏」が登場する。これは蜷川式胤のことだろう。この他にも名前はあげられていないが複数の専門家の意見が紹介されている。外国人と知識との仲介役を果たす情報提供者<sup>インフォーマント</sup>の存在も重視されるべきだろう。知の形成過程の問題としても興味ぶかいと思う。

#### 註

- (1) 石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人9 医学』鹿島研究所出版会、一九六九、篠原宏『日本海軍お雇い外人―幕末から日露戦争まで』(中公新書893) 中央公論社、一九

八八、および、隈元謙次郎『お雇い外国人16美術』鹿島出版会、一九七六、参照。  
また、最近の例に、河野哲郎『日本アジア協会とその周辺』『ミュージアム』五七〇、二〇〇一、がある。

(2) 菊池重郎「アンデルソン小考(上・中・下)」『明治村通信』四一、四四、四九、一九七三～一九七四。

(3) アーネスト・サトウ編著／庄田元男訳『明治日本旅行案内』上巻、平凡社、一九九六、五頁。

(4) アーネスト・サトウ／庄田元男訳『日本旅行日記1』(東洋文庫544)平凡社、一九九二「解説」二九五頁。

(5) アンダーソンのいう六つの分野の原文表記は次のとおり。(一) "Pictorial art" (二) "Plastic art.-Clay figures, pottery and porcelain" (三) "Sculpture in wood, stone, metal, ivory and other materials" (四) "Engraving upon wood and copper for printing" (五) "Lacquer" (六) "Miscellaneous works" である。

(6) 一九三九年の第六版を翻訳した、チェンバレン／高梨健吉訳『日本事物誌1』(東洋文庫131)平凡社、一九六九、をもとに、初版との相違箇所を改めた。一八九〇年の初版本の原文は次のとおり。

A curious fact, to which we have never seen attention drawn, is that the Japanese language has no genuine native word for "art". To translate the European term "fine art", there has recently been invented the compound *bi-jutsu*, by putting together the two Chinese characters *bi*, "beautiful", and *jutsu*, "craft", "device", "legendmain". But this compound is only understood by the educated.

(7) 馬淵明子「序文・ジャポニスムとテキスト」(復刻版ジャポニスムの系譜第1回配本初期英語文献集成別冊付録) Edition Synapse 一九九九。

(8) 『大英博物館日中絵画目録』の序文のなかで、アンダーソンが「一握りの熱心な収集家と研究家をのぞいて、日中の美術はほとんど注目されることがなかった」として収集家たちの名前をあげているのが貴重だ。そこにはフランスのビュルティ、デュレ、チエルヌスキー、ゴンズ、モンテフィオレ、ビング、ドイツのギールケ、ナウマン、アメリカのモース、ジャーヴィス、日本滞在中のプリנקリー、フェノロサ、ガウランド、そしてこの国、つまりイギリスのA・W・フランクス、E・ギルバートソン、ミットフォード、アーネスト・ハート、T・W・アレクサンダー、H・S・トウロワー、オールコックの計二〇人の名前があるが、アンダーソン自身もその一人に数えれば、当時、この二一人が代表的な収集家かつ研究家と見なされていたことになる。

(9) アーネスト・サトウ／庄田元男訳『日本旅行日記2』(東洋文庫550)平凡社、一九九二、第一章。